

団体体操と伴奏音楽との融合について

～第15回全日本学生体操選手権大会優勝作品『流れ』より～

Fusion of Group Gymnastics and Accompaniment Music
～ Performance Named “NAGARE” of the 1st Place of the 15th Japan
InterCollege Championships of Rhythmic Gymnastics ～

キーワード：団体体操、伴奏音楽、動きと音との融合

和田 春恵 長谷川 洋子 菊本 哲也

I はじめに

現在の東京女子体育大学・東京女子体育短期大学(以下「本学」と記す)のダンス部は昭和25年に創部された。この年は本学が東京女子体育専門学校から東京女子体育短期大学となった年で、ダンス部は非常に長い歴史を持つクラブである。当初の活動内容はボーデのドイツ体操などに学んだ藤村トヨが提唱した「自然運動」を基盤とした、音楽体操を身に付けることであつたと考えられる。また、ダンス部が創部された年に開催された全日本学生体操選手権大会から団体種目が競技として加わつたため、ダンス部員はダンス的要素が多分に含まれた音楽体操で出場し、優勝を勝ち取つた。この後、ダンス部の活動は体育ダンス、音楽体操、創作ダンスと多方面に渡っていたが、音楽体操の演技で参加していたこの競技が団体徒手体操、新体操競技と変化していったため、ダンスに関わる本来の活動をしながら、同時に競技会に向けた選手強化・選手派遣が必要となり、ダンス部の活動は非常に忙しいものとなった。世界新体操選手権大会に出場するようになった昭和44年からこの傾向はさらに強くなり、創作ダンスと新体操競技の両活動を1クラブで実施するのは困難となり、昭和49年にダンス部と新体操部(昭和61年にクラブ名を変更し新体操競技部となる)に分かれた。

このような過程を経た結果、藤村トヨが推奨して

いた律動運動、いわゆる自然運動(以後自然運動と記す)、音楽体操は時代の流れと共に変化しつつも、現在もダンス部と新体操競技部の活動や動きの中にその片鱗が見いだせ、それぞれに成果をあげている。

II 研究目的

当初体操音楽学校として設立された本学は、音楽と動きがお互いに及ぼす影響を重視し、教育に利用してきた。その歴史の中でダンス部から新体操部に引き継がれ活動してきた全日本学生体操選手権大会における変遷を、音楽との関連から見直したとき、多くの転機がみられたが、その中でも本学にとって最も大きな転機は昭和38年といえる。

それまでは既成曲、既成作品で競技会に出場していた本学は、この年初めて選手の考え出したオリジナルな演技に合わせ、筆者の菊本哲也が作曲したオリジナル曲で出場したのである。この違いは単に既成曲を使用せず、オリジナル曲を使用したということではない。音楽に合わせ演技を構成するのではなく、動きを先に構成し、その後動きに合うリズム、メロディーを作曲するという今まで行っていない試みであつたのである。この挑戦の根幹には、「自然運動」を最大限に活かし、かつ音楽との融合をはかるという本学の伝統的な考えがあつた。

そこで、昭和38年第15回全日本学生体操選手権

大会において演技された作品(後に『流れ』と命名)の動きと手具操作を分析し、「自然運動」がどのように活かされていたか、また、手具操作の種類や新しい操作法の開発などがどのように工夫されていたかを導き出したいとの思いからこの研究に取り組んだ。それらの内容を探り、音楽に合わせた動きの構成方法や、動きの種類による音楽構成の違いなどを分析、研究することで、音楽が動きに及ぼす影響と動きに適した音楽について導き出したいと思う。この研究が音楽と動きの融合について見直す機会となり、多くの授業指導にも活かせる内容を含んでいると考える。

III 研究方法

1. 資料により全日本学生体操選手権大会の開催状況を調査
2. 昭和38年第15回全日本学生体操選手権大会に出場した選手への聞き取り調査
 - ・ルールについて
 - ・身体の動きと手具操作について
 - ・開催地、開催状況、服装など
3. 『流れ』の作品を集録したビデオにより身体の動きと手具の操作方法の分析
4. 『流れ』の伴奏音楽の作曲姿勢や演奏上の留意点および身体の動き、手具の操作方法を譜面¹⁾と照合

IV 結果および考察

1. 昭和38年頃の全日本学生体操選手権大会の開催状況

ダンス部が創部される前年の昭和24年に第1回全日本学生体操選手権大会が開催された。第1回目は体操競技のみが行われ、昭和25年の第2回全日本学生体操選手権大会に初めて団体競技種目が加わり、東京女子体育短期大学チームが優勝した。創部と共に優勝を勝ち取った後連勝を続け、この競技は昭和49年に創部された新体操部に引き継がれ、さらに連勝を重ね現在63連勝中である。

(表1)のように昭和38年頃、競技会に出場するた

(表1)全日本学生体操選手権大会の開催状況
(第36回～40回)

年	回	開催	選手名		種目
昭和36	13	岡山	松浦 繁美 土井 和子 村上 珠美	加藤八重子 小野てつ子 渋江 峰子	規定演技 輪 6
37	14	札幌	藤原まき子 山田 明子 菅野 美代	斎藤トシ子 下村真知子 吉田 英子	規定演技 布 6
38	15	徳島	松浦 繁美 大谷 佳子 神川 悦子	加藤八重子 高橋 光世 岡本 敏子	規定演技 扇 6「流れ」
39	16	群馬	藤原まき子 大谷 佳子 田中三津子	山田 明子 高橋 光世 新見 賢子	規定演技 扇 6
40	17	高知	大谷 佳子 田中三津子 甲斐 和子	高橋 光世 矢野 恵子 橋本 シゲ	規定演技 ボール 6

めには規定種目と自由種目を行う必要があった。規定種目は出場校すべてが同じ演技だが、自由種目はその名の通り演技構成と使用手具はともに自由で、その演技の出来栄で優劣を決める競技システムであった。競技会で実施される自由種目は既成の伴奏曲による既成の作品でも良かったそうである。本学の選手は昭和37年まで既成曲を使った伊澤エイ作品で出場していたが、昭和38年に本学に就任した筆者の菊本哲也にオリジナル演技(当時の選手による創作)の作曲を委嘱したのである。現在の新体操競技においてオリジナル演技は当たり前のことであるが、当時オリジナル演技で競技会に参加することは、非常に希有で斬新だったそうである。使用手具は昭和36年が「輪」、昭和37年が「布」、昭和40年がボールといった体操用の運動用具であったのに対し、昭和38、39年の競技会での手具は「舞扇」と、運動に使用するには非常に珍しく、異色の手具使用となった。この作品は、競技会参加後『流れ』と銘打たれ、「自然運動」を活かし、動きと音楽が完全に一体化した優れた作品として現在まで伝承され、第2回・第30回新体操研究発表会、および第30回ダンス研究発表会において再演されている。

2. 昭和38年第15回全日本学生体操選手権大会
に出場した選手への聞き取り調査

出場した6名の選手のうち、下記の4名の選手に
アンケート及び数回の聞き取り調査を実施

- ・ 加藤 八重子 (改姓 藤島)
- ・ 松浦 繁美 (改姓 高橋)
- ・ 大谷 佳子 (改姓 加茂)
- ・ 高橋 光世 (改姓 山本)

(1) 採点規則について

① ルール上要求される内容

- ・ 規定演技と自由演技の合計点で順位を決定
- ・ 規定演技は純体操的な運動
- ・ 自由演技の手具および演技内容は自由
- ・ 演技面は12m×12mの床
- ・ チーム構成人数は6名
- ・ 団体同時性を重視し、動きの美しさを競う

② 演技時間

- ・ 4分～4分30秒

(2) 身体の動きについて

- ・ 自然な動きのつなぎ
動きの基礎は藤村トヨが提唱した「自然運動」に基づき、伊澤エイ作品の『泉のほとり』や『水藻』などの美しい動きを参考とした。
- ・ 流れるような動きとスムーズな移動による隊形変化
- ・ 強弱の変化
流れるような動きが多かったため、演技の変化のため後半に“緊張(強)”の動きを入れた。また、各選手の移動方向の変化で、“緊張(強)”の動きをより強調した。
- ・ スピードの変化
柔らかい動きとジャンプなどのスピード感のある演技で緩急の変化をつけた。

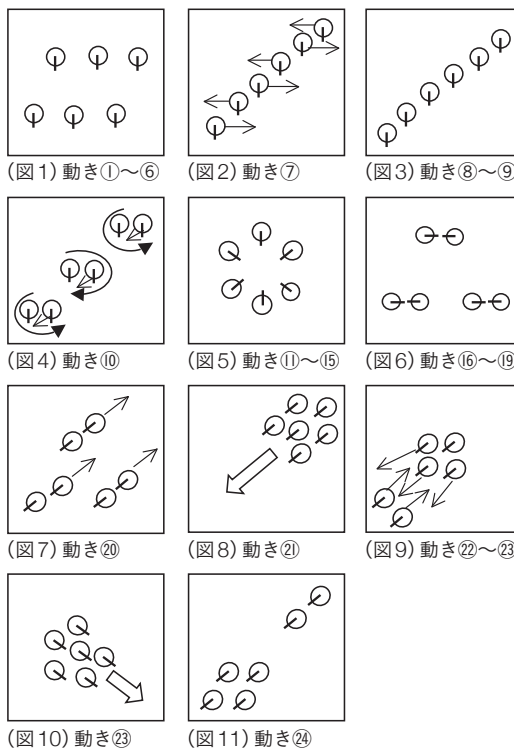
(3) 扇の操作について

- ・ 扇の動きの基本は伊澤エイ作品の「いちよう円舞曲」を参考としたが、さらに今までにない新しい扇の操作方法を考え出した。
——小扇骨の間に人差し指を入れ、扇をくるく

る回す

- 手首をひねって扇を8の字に回転させる
- 扇沿端や扇の要を持った操作

(4) 演技中の隊形変化(フォーメーション)



(5) 扇とレオタードの色、デザイン

- ・ 扇-色: 銀色、舞扇(扇身の長さ29cm)
- ・ レオタードの色-明るい青(それまではほとんどが紺だったが、明るい色にした)
- ・ レオタードのデザイン(図12の写真参照)




(図12) 『流れ』の選手


3. 『流れ』の作品のビデオ分析、および伴奏音楽の作曲姿勢や演奏上の留意点および身体の動き、手具の操作方法を譜面¹⁾と照合

(1) 『流れ』の作品が再演された第30回ダンス研究発表会での演技を収録したビデオにより身体の

動きと扇の操作方法を調べ、その伴奏音楽を記した譜面¹⁾と照合した。また、曲のポイントと演奏上のポイントも合わせて記載したものが、以下の図である。なお、図は本研究のために作曲家である菊本により加筆、データ化された楽譜を使用。

Andante Tranqiro



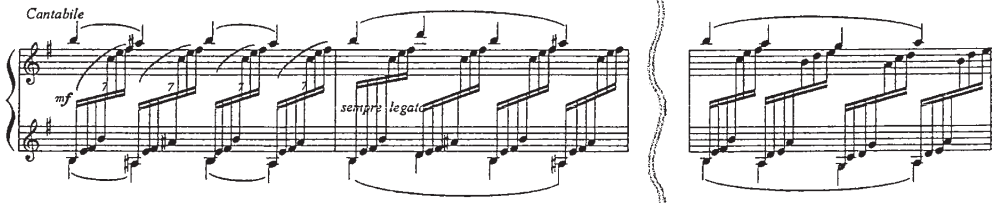
楽譜							
ポイント	音楽の	序奏：静かな低音の ostinato (伊) で始まる。2点口音の trill (伊) は、この曲全体の tonic (英) (主音) のホ音に対する dominant (英) (属音) としての予出でもある。なお、最後はこの音の trill (伊) で終わるよう構成されている。	主題1は日本情緒豊かで優雅な琴曲ふうな表現で始まる。 ※1				
演奏のポイント			扇の舞のイメージで優しく演奏する。			1拍目は軽くアクセント (回転を助けるために)	
扇の操作	合扇を右手に持つ		頭上で扇沿に左手を添える			扇を開く	扇面を上にし動揺
動き	直立	①腕の上挙	腕の下降	腕の動揺 体の横蛇動	歩きで右回り 1周	②腕の動揺 体の蛇動	重心移動

(図 13)

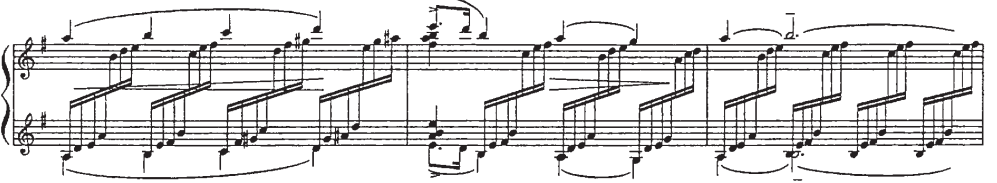


楽譜							
ポイント	音楽の						自然運動の開始には、多くの場合予動があるので、そのことを状況に合わせて活かさなければならない。3、4拍の arepeggio が、まさにその状況である。
演奏のポイント		1拍目は軽くアクセント (回転を助けるために)	3拍目の緊張は tenuto staccato	3拍目の緊張は tenuto staccato 次は引き上げの運動なので「間」			扇ひらひらは、予動の後から弾き始めた方がよい (運動よりわずかに遅れた方がよい)。すなわち、何でもかでも運動にピタッと合わせて弾き始めるのではなく、予動をよく見極めて、その運動表現を音的に効果的に補う演奏が大切である。
扇の操作				扇面を上にし引き上げた後、扇の要を持ち扇面を正面にむけ垂直に立てる。			扇の要を持ちひらひら 扇面を上にもげる
動き	②の動きを繰り返す		③歩と3拍目で緊張 (2歩目)	2歩前進	④腕の8の字回旋、小走り (後退)	ターン	

(図 14)

楽譜			
音楽の ポイント			
演奏の ポイント	優美に、日本情緒豊かに		1拍、3拍は丁寧に <i>tenuto</i>
扇の 操作	両手で扇沿端を持ち、扇面裏を正面にむけ、体前で時計回りの小円を描く	時計回りの大円を描く	左手で扇の要を持って手首を返し、上下の8の字回旋
動き	⑤体の横蛇動とともに右4歩	大きく右に2歩	⑥弾性

(図15)

楽譜			
音楽の ポイント			
演奏の ポイント		1拍目は軽い跳躍に合わせて、優しいアクセント 強すぎず、硬くなく	
扇の 操作	扇面を上にする	時計回りの大円を描く	扇を右手に持ち替え、扇面を上にし、腕の延長上に
動き	小走り、腕の上挙	右足踏み切りのハサミとび(小)腕を右に回し左下で止める	片脚を前に上げ、バランス

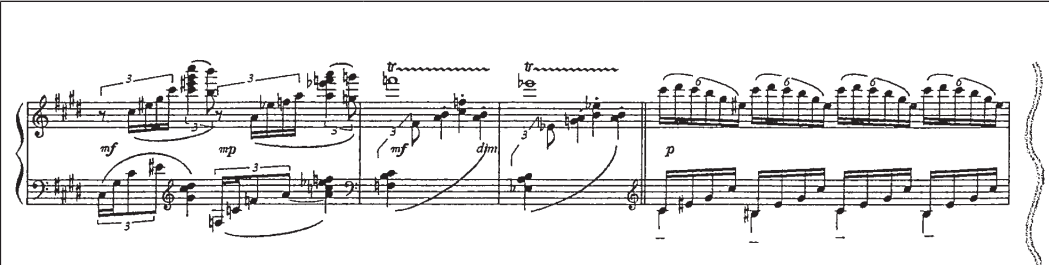
(図16)

楽譜				
音楽のポイント			大きく回るターンは、開放的な増三和音で表現されている。	
演奏のポイント	次のターンへ向かって <i>cresc.</i>		最初の和音を響かせてから <i>arepeggio</i> は弱く弾き始めて <i>cresc.</i> 次の小節のバランスの G# の <i>toremoro</i> へ、 <i>forte</i> で繋ぐ。	
扇の操作	両手で扇沿端を持って頭の延長線上に		扇面を上にし、水平に回す	扇の要を握り、扇を垂直に立てる
動き	⑦側屈しながら、小走りで横移動	⑦の動きを繰り返す	右足軸でターン	左脚を左斜め後ろに高く上げバランスで静止

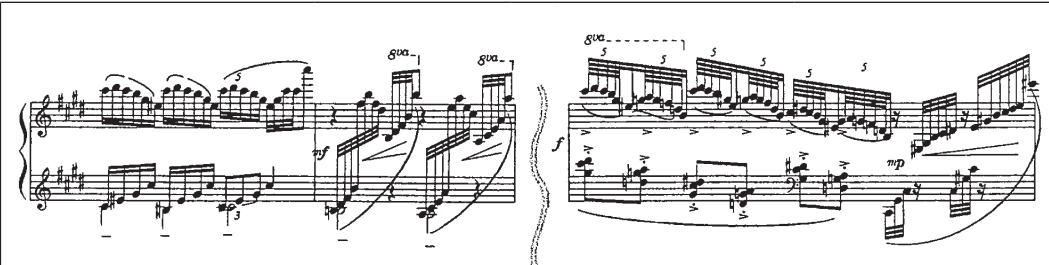
(図 17)

楽譜				
音楽のポイント	※ 2、強い扇の回旋は引き締まった長三和音と全音階の使用で表現されている。			
演奏のポイント	扇の回旋の振り始めによく合わせて、新鮮で躍動的な扇の表現を助ける。	繰り返してある次の動きに移行するときは、その「間」に留意する。	拍子感にとらわれず、「前から後ろへ」の運動に合わせる。	
扇の操作	扇の回旋（頭上で手首をかえす）	扇の要を握り、扇面を前にむけて垂直に立てる	扇面を下にして、腕の延長上で動揺	
動き	⑧弾みながら側屈し、腕を回旋	パッセした後、ターン	⑨脚を前に出し、後ろに引きながら腕の動揺と体の蛇動	

(図 18)

楽譜			
音楽のポイント		扇の軽やかな回旋は、高音の trill で表現されている。	trill の続く C # 長三和音の arpeggio (伊) が、穏やかな主題 2 の低音再現に乗せて、新しい音世界を奏でて行く。
演奏のポイント	同様に	扇の指回しの trill は、次の変化を期待させる移行部として大切に	優美・華麗な表現で
扇の操作		小扇骨に人差し指を入れて水平に回す	
動き	⑨の動きを繰り返す	⑩扇回し	小走り

(図 19)

楽譜			
音楽のポイント		ここからしばらくは、いわゆる cadenza のように動きに忠実に合わせた ad lib. (羅) となる。	
演奏のポイント	最後は次の運動に入る前の「間」に留意する。	低音を聞かせながら、1小節に1回、2小節に1回の反りに合わせる。	1拍に1運動を3回…4拍で十分反り、poco rit. しながら「間」をとる。
扇の操作		扇面上にし、手首の返しで前後に揺らし、頭上でかざす	右手で扇沿端を持つ 両手で扇沿端を持ち、頭上に
動き		①座での蛇動、後倒	②座での腕のゆるやかな振り ②の動きを繰り返す 側倒

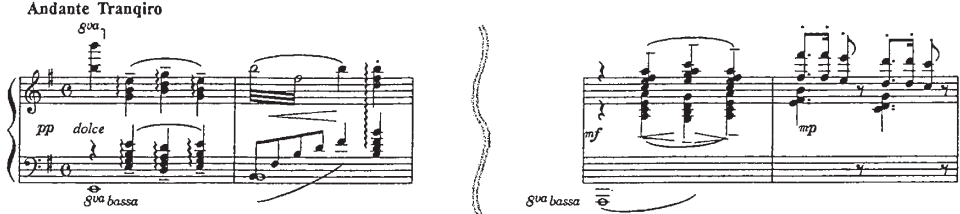
(図 20)

楽譜			
音楽のポイント			
演奏のポイント	1小節1回ずつの運動とポーズ	起き上がるようにpからcresc.…強くなり過ぎず…最後の3音をたっぷり tenuto して次へ繋ぐ。	4拍目は動きに合わせてかなり遅く弾く
扇の操作	扇の要を持ち、ひらひらさせた後、要を握って垂直に立てる	手首を返ししながら扇沿端を頭上に	
動き	⑬上体の前屈、緊張	⑭立ち上がる	ターン 両手を引き上げる

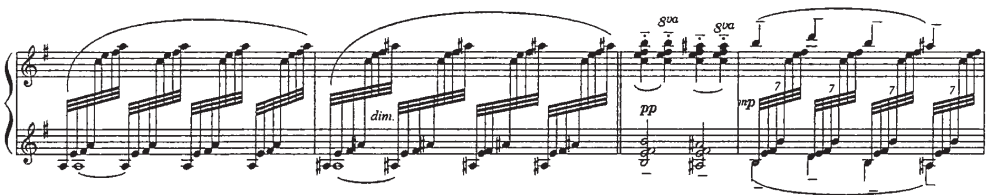
(図21)

楽譜			
音楽のポイント	※2と同じ主題3であるが、ここではしっかりしたジャンプの連続なので、3連譜ではなく、改めて3/4拍子で記譜した。		
演奏のポイント	主題2による1小節の助走と2小節のジャンプによく合わせる。		運動をより効果的にカバーしながら、cresc.…decrec. つまり中膨らみに演奏する。
扇の操作	扇の要をもつ	扇沿端を頭上に	両手で扇沿端を持ち、扇の開閉
動き	⑮左方にシャッセ	ツイストジャンプ 後倒	⑯小走りしながら左右側屈し、2人で向かい合う

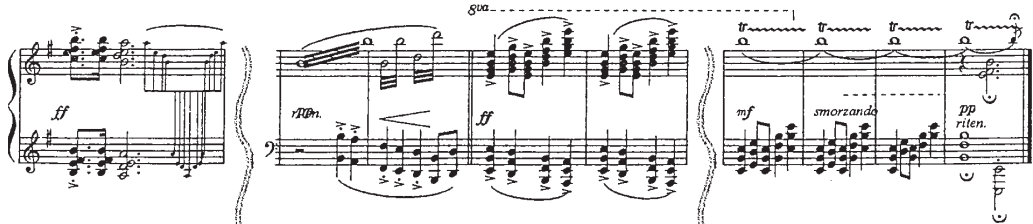
(図22)

楽譜		
音楽のポイント	2人組のいかにも優しい運動は、主題1の静かな変容の回帰で表現されている。	
演奏のポイント	<p>バランスの運動に合わせて、<i>piu mosso</i> (躍動して)。1、3小節は <i>mf</i> で中膨らみに…2、4小節は、さらに早く <i>mp</i> で軽やかに。その後、少し「間」をとる。</p>	
扇の操作	扇面を上にする 扇を上げて持ち替える	2人で互いの扇沿端を持つ 2本の扇の要を合わせるように垂直に立てる
動き	⑦ 2人で左手を繋ぎ、右腕の動揺 ターン	⑧ 2人で向かい合い後ろバランス バランスステップ

(図23)

楽譜		
音楽のポイント		
演奏のポイント	1、2小節は <i>meno mosso</i> で <i>mf</i> くらいから <i>pp</i> の主題2の変容へと繋ぐ…	
扇の操作	右手で扇の要を持ちひらひら 扇の要を握り垂直に	
動き	⑨ 小走りし2人で左手を繋ぐ 左手を繋いだまま前後に並ぶ	⑩ 右足を右斜前に出しながら上体と腕を蛇動させた後左脚を後ろに引く 小走り

(図24)

楽譜					
ポイント			<p>※1. 主題1はこの部分のイメージにより想像されたもので、後に冒頭部分の運動に合わせて変容された。すなわち、曲の顔ともいえる主題1で序奏とcoda(伊)を構成したことになる。</p>	<p>運動の静まりに合わせて、主題1を低音で回想しながら、2点口音のトリルが次第に弱く、消えるように(smorzando)(伊)設定されている。</p>	
演奏のポイント	<p>ジャンプは決然と(risolutamente) ffで始まり、小走りは arpeggio で巻き上げるように…。4小節は allargando(次第に遅く幅広く)でコーダに繋ぐ。</p>	<p>主題1の付… 強い動きのアクセントに合わせて叩くように…。</p>	<p>低音の主題1とともに smorzando</p>		
扇の操作	<p>扇を回す</p>	<p>扇の要を握り垂直に</p>	<p>扇面裏を正面に向け、回旋</p>	<p>扇の要を握り垂直に立てる</p>	<p>扇の8の字回旋</p> <p>扇の要を軽く握り垂直に立てる</p>
動き	<p>②片脚踏み切りの大ジャンプハサミ 小走り とび</p>		<p>②側屈、前屈</p>	<p>③小走り、緊張(片脚を後ろに引いて前に出す)2回繰り返し方向を変える</p> <p>④小走り</p> <p>静かにポーズ</p>	

(図25)

(2) 『流れ』の作曲姿勢に関して

演技の手具は扇子、動きは艶やかなスペイン風ではなく、清楚で嫺やかな日本舞踊的な作風で柔軟な運動を多く含むので、伴奏音楽は必然的に日本旋法による主題をイメージすることになった。リズムについては、極力動きに一致させたリズムを取り入れている。

和声的には、日本旋法に基づく5度和声や、カラーコードなどを、それぞれの旋律に合わせて使用している。

演技全体から受けるイメージは、今日の新体操のような激しいジャンプは少なく、むしろ優しさ・優雅さが強調された柔軟な動きが多いので、その伴奏音楽には印象派ドビュッシーの語法がふさわしかった。すなわち、日本旋法および5度和声・全音音階・カラーコード・並列和音・隣接和音などの使用による音楽となったのである。(新しい音楽通論 203頁、近代和声参照)

もっとも、このような作曲姿勢の背景としては、前年に菊本がドビュッシーの影響を強く受けたヴァイオリン・ソナタを書いて学内演奏(於:芸大奏楽堂)しており、その影響もあったようである。

(3) 演奏上の留意点

「一言で言えば、動きに忠実に合わせることである。」

速さ・強さ・表情などのすべてを、演技に合わせていくことが大切である。ただし、「予動」には注意を要する。音楽的に不可思議なこともあるが、演技を引き立たせるためには、やむを得ない。このことはバレエでのエトワールのジャンプの着地やターンの停止に合わせて、オーケストラの指揮者が指揮棒を下ろすのと同様に、広義の舞踊音楽(動きの伴奏音楽)の宿命なのである。但し、『流れ』の音楽については、動きに合わせて作曲しているので、非音楽的な奏法を要求されるような部

分は比較的少ない。多少の「間」や「矯め」と言った細やかなアゴークは、演奏上の「歌い上げ」とも似通ったところがあり、それほど特異なことではない。

V まとめ

本学に伝承されている「自然運動」と音楽の融合についての研究として『流れ』の作品を選んで分析したことは、呼吸を生かし無理のない運動を行うための有効な方法であったと考える。純粹に音楽として芸術性の高い曲や理論上計算し尽くされた名曲などを伴奏音楽として運動に合わせるためには、意図的に呼吸や運動のきっかけを遅速したりして、無理な演技が要求されることがある。ドイツの舞踊家Mary Wigmanが無音楽の舞踊に挑戦したのも、「舞踊の表現は音楽の芸術的形式や法則に従ったり束縛されてはならない。舞踊の自由な表現は先ず音楽の束縛から解放されて初めて可能になる。」²⁾との考えによるものである。人間の内部のリズムを重視した結果が無音楽となったわけである。

一定のスピードで演奏され、録音された既成の音楽ではリズム・テンポ等での規制を受けることになる。無理のない呼吸に合わせるため微妙なスピード変化が要求される「自然運動」の伴奏音楽には創作が必要となり、まさに無音楽舞踊の考え方に等しい。同様に、手具操作に関しても既成の音楽に合わせるには、手具の動きの自然性を無視して動かさなければならないこともある。その場合、必要以上の筋力を使うことや不自然な手具操作にも対応できるような巧緻性を高めていかなければならないのである。

昭和38年当時は「自然運動」を重視し、ひたすら無理のない動きを求め、そこに価値を見いだしてきた時代であった。そのため、動きを優先としたオリジナルの伴奏音楽が必要であったと考えられる。また、競技会に合わせた演技であるため、一定のスピードの動きだけでなく、それぞれの動きに合わせた音楽のイメージやスピード、拍子があり1曲の中にそのすべてを盛り込まなくてはならず、あらゆる動きを自然の原理に合わせ実施するためには、オリジナルの伴

奏音楽が重要な役割を持っていたのである。さらに、全日本学生体操選手権大会において連勝している大学であることから、他大学よりも一歩先んじた挑戦をしていたことが読み取れる。それは、オリジナル演技、オリジナルの伴奏音楽に加え、運動用具としてはむしろ使いにくい舞扇の使用であった。伊澤エイ創作のダンスの作品の中に、いくつか舞扇を使用した作品はあるが、多様な手具操作や身体の動きを必要とする競技会向けの演技を構成するには、新しい扇の操作法も考え出す必要があり、様々な動きを行うにも扇の特性に合わせた運動の種類を抽出していったのであろう。

このように多くの新しい内容に挑戦しながらも、伝統ある「自然運動」と伴奏音楽を大切に構成した『流れ』の作品から、今も多くのことが伝えられている。伴奏音楽と動きを重視した考え方はその後も受け継がれ、前述したようにダンス部と新体操競技部の活動にも成果が現れている。例えば、ダンス部では神戸ダンスフェスティバルにおいて過去23年間のうち「音響(選曲自作音)の工夫に対して」という賞を5回受賞しており、また音楽と動きの関係を重視するルールで採点される新体操競技部では、国内外において高く評価されている。

また、昭和25年に第2回全日本学生体操選手権大会が開催されて以後、この競技会は現在まで引き続き開催されてはいるが、競技種目の内容は大きく変わってきた。自然な動き、身体に無理のない動きを重視してきた競技から、現在は手具操作に運動の自然性を求めながらも、身体に無理のない動きとはほど遠い内容となってきている。優劣を争うスポーツを突き詰めると、人間の極限に挑戦しなければならないため、やむを得ず無理をしたりケガなどのリスクを伴う動きもしなければならない。特に昭和43年に世界選手権大会に初めて出場して以来、この傾向は強くなっている。

時代の流れやルールの変化により、現在ではオリジナルの伴奏音楽に合わせた演技構成で競技会やダンスフェスティバルに参加する機会は少なくなってしまった。しかし、創立以来本学が伝承してきた「自然運動」と共に、『流れ』の作品を通して伝えられる動

きと伴奏音楽の融合の大切さを、授業やクラブでの活動等を通して次代に伝え続け、今後も本学学生の活動が運動と伴奏音楽との融合の点から高く評価されるように努力していきたい。

【引用文献】

- 1) 体育音楽・ピアノ伴奏法 (p. 81)
著 者：菊本 哲也
発行所：明治図書 1969.5
- 2) メリー・ヴィグマンの芸術と思想 (p. 16)
著 者：邦 正美
発行所：論創社 2000.1

【参考文献】

- 3) 新しい音楽通論
著 者：菊本 哲也
発行所：全音楽譜出版社 1994.3
- 4) Mary Wigman The Language of Dance
出版社：First published in the UK
1996.7
- 5) Mary Wigman 舞踊の表現
著 者：Mary Wigman
訳 者：河井 富美恵、林 悦子
発行所：(株)大修館書店 1976.2